

四川省大凉山彝族の狩猟伝承

湯川 洋司[※]

はじめに

本稿は、1995年9月22日に、中国四川省彝族自治州美姑県三河村の互西智則【クシニズ】氏（75歳）から聞いた狩猟伝承に関する報告である。聞き手は安室知氏（横須賀市人文博物館）とともに行ない、日本語と漢語間の通訳を蘇素卿氏（筑波大学大学院）に、漢語とイ語間の通訳を達夫【ダフ】氏（四川省美姑県国土局職員）にお願いした。通訳の労を果たして下さったお二人には心からなる感謝を申し上げます。

なお文中では、イ語語彙は【 】でくくり、日本語カタカナ表記を用いて示したが、日本語にはない音もあり、その表記は正確とは言えず便宜的なものにとどまる。

1, 話者互西智則氏について

互西智則氏は美姑県巴普鎮の説羅尼峨（【ソノレオ】）という所の出身で、20歳過ぎに現住地に来て来た。【ソノレオ】での生活は7～8代前の先祖までさかのぼることができるという。現在は店を営んでいる。

2, 猟の経験

覚えている限りでは、7歳のときの記憶がもっとも古いもので、その頃には森があって動物もたくさん棲んでいた。16～17歳の頃に猟を始めた。以前はいま住んでいるこの近辺の森の中でも動物をとった。1950年代までは狩りをしたが、それ以降は漢族が入ってきて森を切ってしまったので猟をしていない。猟師のことを【クシツォ】というが、これは獣を捕る人という意味である。

3, 猟の対象動物

狩猟の対象になる動物には、鹿【チ】（漢語では獐子）、麝香鹿【ル】、兔【アル】、猪【ブンギ】などがいる。鹿は山の上の方に、麝香鹿は山の中腹に、兔は山の麓の方に生息していたが、猪は農作物を餌にして食べるので家のまわりにいた。

4, 季節と猟

鹿、麝香鹿などは6～7月に捕れ、これらの猟はほとんどこの時期に行う。雪の季節になると農作物がないので猪もどこかに行って姿が見えなくなり、冬は鳥類や兔しか捕れない。兔の巣の

※山口大学教養部助教授

ある場所はだいたい決まっているので、もし冬にその巣を見つけたら冬眠中で逃げないから必ず捕れる。

5, 獵場と家支

どこへ狩りに行くかはだいたい決まっている。それは家支ごとに狩獵活動をする範囲が決まっているためであり、互西智則氏の属する家支ではいま住んでいる所の山の裏側全部がその範囲になっている。

山で獣を追って行けば、その家支ごとに定めた境目を越えてしまうことが当然起きる。その場合は、とりあえず捕ってからその範囲の地主の人に獵師自身が獲物を届けることになっている。そうすれば地主はその半分を戻すか、全部戻してくれる。もしそのとき双方の家支の関係が陰悪な状態にあったとしても、獲物を届けるときは争うことはない。

獵師が多い家支は、【ジヌトゥズ】（【イヌトゥズ】とも【ジミドゥズ】、【イヌズフェ】とも聞こえるが、以下では【ジヌトゥズ】に統一して表記する。）という家支であり、この家支から獵師は始まったと言われる。因みに、互西氏はこの家支ではなく、【アムストゥ】の家支に属している。【ジヌトゥズ】の家支は今も存続する大きな家支であるが、この家支の祖先に関しては獵師と獵犬にまつわる次のような【クモアコ】の伝説が語られている。

【クモアコ】とは獵犬の祖先で、それ以前は犬が獲物を捕って人間を助けることはできなかった。【スメヒメ】という人が、【モウスメ】（地名。【モウ】は天の意味、【ス】は木の意味、【メ】は青苔の意味。）という所で獵師【ジヌトゥズ】を発見した。獵師【ジヌトゥズ】はピーモーであり、山の神の息子と伝えられている。この獵師が連れていた獵犬が【クモアコ】である。この場所の名【モウスメ】を家支の祖先の名にし、【スメヒメ】を2番目の祖先の名に、そして【ジヌトゥズ】を3番目の祖先の名にした。そして4代目は【トゥロ】、5番目は【アチェ】、となった。この家支が【ジヌトゥズ】という今も存続する大きな家支になったのである。このように、家支はそれぞれ固有の伝説をもっている。

なお【ジヌトゥズ】はピーモーの7つの宗派のうちもっとも位が高いと言われているという。ピーモーの他の6宗派は、【ビスラツェ】、【ジャピアイジェ】、【アグソソ】、【ピクウアホ】、【ヤグスプ】、【ジョクング】、ということである。

6, 獵の道具

鉄砲を使うのは7, 8歳の頃に見たことがあった。イ族は互西智則氏の生れる前に鉄砲をすでに使っていたが、弾の値段が高かったので獲物を捕るのに使うことはなかった。

このように鉄砲は使わなかったので、獵犬を使って動物を追い込み、疲れたところを矛と矢を使って捕る方法を用いていた。猪は走らないので、獵犬を使わず矛と矢で捕ることもできるが、その他の動物は獵犬を使って捕った。

獵犬はふつう1人が3頭使うが、多い人は8頭も使う。獵に行く時にはいつも家支の人たちと

出かけ、協力をして獣をとるので猟犬の数は多い。

7、猟犬について

良い猟犬とはよく獲物をとる犬である。性別は問わず、敏捷な犬がよい。形から言えば、耳が尖っていて、胴が長くなく、鼻が美しい犬がよい猟犬の条件を備えている。毛色や尻尾の形はとくに問わず、足は長くも短くもなく付け根近くに肉がついているものがよい。

犬の嗅覚は鋭い。そのことを示すこんな話があった。犬が兎を追って行き、兎は見つかったが先に進もうとしない。よく見ればそのもっと先に狼がいる。その匂いで狼に気付いていたので犬は進まなかったのである。

猟犬は血統が大切にされているから、家犬とは掛け合わせない。互西智則氏の飼った猟犬は純粋（純血）種である。猟犬を手に入れるには、買ったり、メス犬をもちよりその犬と種つけして、その子をとったりした。

猟犬の訓練は、親犬と一緒に狩りに連れて行ったり、猟以外の時にも人間が子犬を連れて行き、遠く離れて隠れた人間を探せるかどうか試すなどして行なった。

猟犬は獣と戦うのだが、キツネに出会うと遊んでいるような振りをする。互西智則氏はこれを犬とキツネは親戚同士だと考えているのだろうか、と説明する。ほかの犬と一緒に人間が来るまで獣と戦うが、そのうち1頭が怪我をしたら逃げる。犬にとってこわい敵は猪である。猪はよく犬を噛むからである。足を怪我して役に立たなくなった猟犬は、家において死ぬまで飼い続ける。

もし死んだら穴を掘って埋葬してやる。ただし墓はつくらない。その場所は、山の奥のどこにでもよく、谷のような山の窪みにでも埋める。こうするのは猟犬の場合だけであり、猟犬を埋めるときにはクーチャパバ（そばばん）とか、トウモロコシパバを一緒に埋める。このとき犬の守り神（後述）に対する特別な作法はない。

8、互西智則氏が飼った猟犬

互西氏がかつて飼っていた猟犬のうち、名前を覚えているのは、【デイス】、【アコ】、【ジェコ】、【クベ】などで、次のようである。

【デイス】：オス犬で他所から買ったもの。デイスとは黄で、鷹のように狂暴な動物の意味。

【アコ】：メス犬で【ジェコ】の母親。

【ジェコ】：アコの子でオス犬。狂暴なという意味をもつ名前。

【クベ】：オス犬。【ク】は犬の意味で、【ベ】は早いという意味。

なお、【アコ】という名前は「狂暴な」という意味であるが、その名前をつけたのは、【ジミドゥズ】という名の猟師が飼っていた伝説の猟犬【クモアコ】にならったものである。【クモ】とはメスの意味で、その猟犬が狂暴であるので、そこから【アコ】（狂暴なという意味）という名を自分の犬にもつけたという話である。

9、罾獵の方法

罾の仕掛けには次のような種類がある。

- (1) 穴を掘り、その口に竹を渡した上に葉っぱをかけておく。これを【ムンチュ】(漢語で桐)という。猪以外は何でもこの方法で捕れた。
- (2) 紐を丸くして、その端を木の枝に結んでおく。獲物がかかって首に紐がかかるのを吊り上げるという方法である。これを【マッベ】と言う。
- (3) 馬の尻尾の毛を取って撚り合せひものようにし、それを丸めて穴状の結び目を幾つもつくる。これを仕掛けておくと、通りかかった野生の鶏(鳥?)の足にかかる。そして自然に締まる。これを【ハツムッ】(【ハツブ】とも聞える)という。鳥を捕るという意味である。
- (4) 【ドゥラ】という名の毒草(【ハットォロ】とも言ふ。漢語は不明。)をパパの中に混ぜ、猪などの動物がよく通る所に仕掛ける。その呼び名はとくにないが、足跡を見つけた巢の近くに仕掛ける。毒を用いて殺すのだが、人間はその肉を食べても死ぬことはなく大丈夫だという。罾は一人でも集団でやってもよい。仕掛ける場所は家支のなわばりの範囲内である。

10、獵に行く日、行けない日

一年のうちで必ず獵に行くという日がある。曆に示されている十二支のうちの辰、卯、巳の日は必ず行く。その反対に、十二支のうちで自分の家で飼っている家畜に相当する日、たとえば戌(犬)、未(羊)、酉(鶏)の日などには行かない。そのほかには曆に示されている獵に行けない日は決まっていない。しかし、宗教儀式をした翌日や、妻と寝た翌日には行けないとされている。

その宗教儀式とは、(1)鬼を追ひ払うための儀式、(2)招霊の儀式、(3)【ヒンズッ】という儀式、の3つである。【ヒンズッ】は、山羊と綿羊と豚それぞれ1頭を買って殺し、自分の罪を追ひ払うためにピーモーに儀式をしてもらう。これは獲物を捕り過ぎたと自分で思ったときに自分の考えで実行するもので、互西智則氏は1度したことがあるという。

11、獵師と獵犬の守り神

獵師の守り神は山の神(山神)であるが、犬を守るのは犬の神である。「魚をとりにいく時には水の神しか守ってくれない」「狩りに行く時には人間と犬を守ってくれるものが大事だ」という意味のことわざがあるように、山の神と犬の神が守り神とされてきた。山の神と犬の神は、男神と女神どちらの場合もあるという。

獵へは行きたいと思うときに出かけののだが、その場合、早朝に鶏が鳴いたらすぐに出るものとされている。出発するときに女性に出会うと不吉とされているから、女性が起き出す前に早く出る必要があるのである。しかし万が一女性に出会った場合は、獲物がないし、山の神も守ってくれないと言われているから、戻らねばならない。また明日獵へ行くと考えたら、その日は妻と寝てはいけないきまりになっている。

12、狩猟儀礼

山中に山の神や犬の神を祀る特定の場所はない。しかし獲物を捕ったときにその毛を取ってすぐに捨てる作法がある。それは鹿、猪など、どの動物の場合でもするが、背中の中毛をむしる。山の神を祀るという気持ちを示す行為だと説明されている。また獲物を捕ったときには肉を少し取って犬にあげるが、これは犬の神に捧げるのと等しい行為だという。

解体するときには、血を少し犬になめさせ、切開して脾臓を取り出し、その一部分を犬に食べさせる。その場合、右の脾臓を取るのであって、左の脾臓は取ってはいけない。万一、この手順を間違えたら犬に脾臓をやることはないし、人間も獣を放置したまま戻る。これを食べたら人間にも犬にも悪いと言われているからである。右側の脾臓を取るのは、犬の神様は右側で犬を守っているとされる伝説に基づいており、山の神も犬の神が右側で犬を守っていることを知っているという。

山の神に対しては毛を捧げるだけで、ふだんは唱え言をすることはない。しかし、ちょっと大きめの獲物や珍しい動物を捕った場合は、「私はあなたを殺したのではなく、これは山の神、犬の神様の意志でしたことです」という意味の言葉を述べる。その言葉は、同行の仲間にピモがいればピモが、いなければもっとも長老の者が述べる。

なお、不猟が続くときに猟を求めるために行う儀礼はとくにない。また捕獲した動物を飼養することもない。

13、解体と分配

猟の仲間の数が多い時には山で解体するが、場合によっては家に持ち帰り、ひとこと言葉を言う前から解体する場合もある。家に運ぶ場合は、獲物を見つけた犬の飼い主の家に運び、そこで解体する。その犬には前述のように脾臓が与えられ、見つけた犬の飼い主には皮が与えられる。皮には四肢と頭がついており、それらすべてが犬の飼い主のものになる。また麝香はオスにしかないが、これが捕れたときにも犬の飼い主に与えられる。このように犬や犬の飼い主が特別の分け前にあずかるが、仕留めた人には特別に分け与えられるものは何もない。

山で解体する時には、たまたま来合わせた人も含めて、これを見た人すべてに平均に分配する習いである。分配するときにはくじ引きをするようなことはなく、たとえば心臓なら心臓を細かく等分に分けて平等に分配する。あるいは、内臓はいらないからこの部分の肉が欲しいなどと要求することもある。

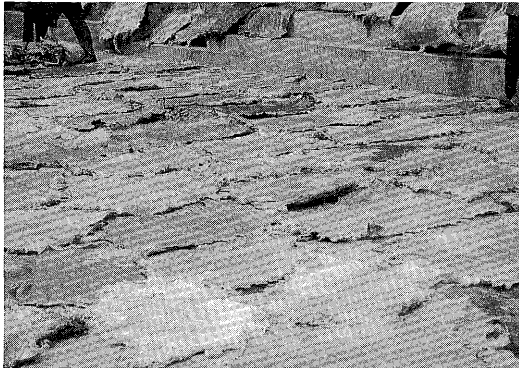
肉は売ることはないし、とくにどこかに供えることもない。肉の量が少なければその場でみんなで食べるし、多いときは持って帰ってきて煮て食べる。もっと少ないと火を通してから子供にあげる。ただし麝香と皮は漢族と交換したり売る。

14、猟の獲得物の交換

麝香は洋服（ワンピース）と交換するが、但しこれにはマント（外套）は含まれない。

麝香の毛皮3枚で塩1斤と交換できた。他の品物とも交換出来るが、塩が欲しいのでほとんど塩と換えた。

交換するには、雷波、西昌、峨辺の3つの都市にいつでも都合のよい時に出かけて行った。漢族の人々がここへ来て交換したものであったが、1956年に塩の売店ができ、それ以降は塩と交換することはなくなった。



95/9/22

招待所の庭に干された羊皮



95/9/24

ツモビ儀式で首の骨を折って殺される
有角の羊



95/9/24

犠牲の羊の血で経文が書かれる